

追手門学院大手前中・高等学校『あゆみ』『はくる』抜粋

— 出口敏雄先生の足跡をたどって —

学院志研究室 藤原 栄一
(初等中等室)

— 大手前中学校 学校（自治会）誌 あゆみ 掲載【巻頭言】 —

「あゆみ」 第35号（昭和59年度／60年3月発行） 発行／出口 敏雄（学校長事務取扱）

【巻頭言】 「歩 む」

校長事務取扱 出口 敏雄

団地住人をしていた新婚当初の頃の古い話しである。階段を挟んで向い側のやはり新婚の御夫婦が、当時としては珍しく乗用車を持っておられ、日曜日に時々ドライブに誘っていただいた。御好意に甘えて同乗させていただいたが、帰宅後私たち「旅行した感じがしないね。」と、よく顔を見合わせたものである。自分で切符を買い、電車やバスに揺られ、そうしてテクテクと歩かねば旅行（見学）した感じがしない。今もそうである。貧乏性というべきか？ しかし、ドライブ旅行は確かに効率的ではあるが、残る印象は薄い。

小沢征爾、広中平祐両氏の対談集の仲に次のような文章がある。

（小沢氏の）先生曰く「映画なんか、ばかでも出かけて行って暗い所に坐ってたら、向こうからくるじゃないか、向こうからこっちに押しよせてくる。お前、なにもしねえだろう。そんなことばかりやってたら、お前の人間てのは無くなっちゃう。本を読むってことは、まず、本を買ってくるか、誰かに借りてくるかしなきゃいかんと、まずそういう努力が必要だ。それから字を知らなきゃいかん。まずその字を理解した上で、今度は文を理解してだな、そこで初めてその情景がお前の頭に浮かぶ。」と。

電気器具、インスタント食品等々、文化が進んで非常に生活が便利になった。労せずして物が得られ、目的が叶えられることが多い。しかし、ロープウェイで果たした登頂と、汗を拭いながら一歩、又一歩と踏みしめながら果たした登頂とでは、その喜びが非常に違う。その後に生かされるその体験の価値は比較にならぬ程差がある。便利さのみを求めず、一步一步着々と努力していく、そういう習慣を今こそ生活の各方面で心掛けて行きたいものだ。

.....

【卷頭言】 「虚心に」

• • • • •

• • • • •

• • • • •

【卷頭言】 「挨 拶」

「勝負の世界には、礼儀の正しさとか、先輩に対する感謝の気持ちがあると、自然に勝負の世界にとけこみ、強くなることが出来ます」

勉強、また然り。

「おはようございます」

毎朝、きっちりと立ち止まって挨拶する人を見ると、「彼（または彼女）今日も一日、まじめに勉強に取り組むのだろうな。がんばれよ！」と、そんな風に心に思う。

.....

「あゆみ」/1988. 3 第38号（昭和62年度／63年3月発行） 発行／出口 敏雄（学校長）

【巻頭言】 「目標を持とう」

学校長 出口 敏雄

毎年二月に耐寒遠足がある。枚方から学校まで、ひたすら歩き（時に走り）続けるわけであるが、恐らくその時々、鳥飼大橋、次は豊里大橋、最後は学校の正門というように目標を定めて歩いたことと思う。もし、砂漠のような所で、目標も目的もなく、ただ歩くのだとすればどうであろう。恐らく同じ距離を歩かねばならぬとしても、想像を絶する精神的・肉体的疲労を伴うことであろう。落伍するものもかなり出てくるかも知れない。

かつて、次のような本を読んだことがある。囚人に対する最も過酷な労働は、例えば穴を掘り、次はそれを埋めもどす。このような繰り返しの作業を命ずることだという。目標（目的）のない作業は、囚人たちにとっても大きな精神的・肉体的疲労を与えるそうである。

長い人生然り。目標（目的）を持つことは重要なことだ。終着の目標、その時々目標。もちろんその目標に必ずしも到達できるとは限らない。目標を変更せざるを得ない事態も生じるであろう。しかし、目標を目指した努力は貴重であり、決して無駄になるものではない。

諸君は今、目標（目的）を持っていますか？

そうして、それに向かって歩き続けていますか？

.....

「あゆみ」 第39号（昭和63年度／平成元年3月発行） 発行／出口 敏雄（学校長）

【巻頭言】 「大きな投資を」

学校長 出口 敏雄

図書室で、図書の利用状況が毎年急速に落ちつつあるとのこと。『マンガ日本史』などマンガが非常な人気となった時期がありましたが、最近はそのマンガもあまり手にとろうとしないと聞きます。本校の図書室だけの現象ではなさそうです。街の書店でも、中学生や高校生が立ち読みしている光景を目にすることが少なくなりました。代わってレンタルビデオの店の前にその姿を多く見ます。そうして、コンピューターゲーム。この二つが現在余暇利用の双壁のようです。いや、余暇以外の時間にも喰いこんでいるのではないのでしょうか。

読書の効用については今さら述べるまでもないと思います。

過去四十年間に日本が驚異的な発展を遂げた原因は、高い教育水準と勤勉さといわれています。しかし、この状況が今後も継続できるかどうか、暗いかげりを感じるのは思いすごでしょうか。いや、国全体のことはさて置き、一個人としてはどうでしょう？ K・ウォードは、次のようにいっています。※「できるだけ多くの分野に、できるだけ多くの勉強時間を投入する人は、自分の将来に大きな投資をしている」と。

生徒諸君。君たちは自分の将来に向かって大きな投資を心掛けていますか？

※「ビジネスマンの父より娘への25通の手紙」（新潮社）

.....

「あゆみ」 第40号（昭和63年度／平成2年3月発行） 発行／学校長 出口 敏雄

【巻頭言】 「謙 虚 に 学 ぼう」

学校長 出口 敏雄

井上靖氏の小説「孔子」が静かなベストセラーとして多くの人達に読まれているようである。「孔子」あるいは「論語」研究の本もずい分と出版されている。

この「あゆみ」の原稿をたのまれ、何について書こうかとあれこれ思案しながら「孔子」読了後、ふと開いた「論語」の頁の次の文章が目に入った。

「子曰く、三人行えば必ず我師あり。その善き者を選^{えら}びて之^{これ}に従い、その善からざる者にして之を改む」

人と接する態度について説いている。謙虚に接してその人の善いところを学びとろう。善くないところは、それを我が身にあてはめ改めよう。同じような意の言葉は他にも何か所か見られる。

孔子は更に人からのみならず、自然 一川の流れ等 一を見て、あるいは物からも何かを感じ学びとる。

このような姿勢は、孔子のみならず、多くの先覚者に共通するところである。そこに、我が身の不完全、未熟さを自ら覚り、謙虚に学ぼうとする旺盛な精神が感じられる。謙虚さを失い傲慢となり、人の善いところも取ろうとせず、否、見ることもできなくなつては、その人に進歩はない。

省みて諸君はどうであろうか？ 十有何歳にして、自分はもう学ぶべきものはないと傲慢に考えてはいないであろうか？ 服装、態度、話し方等見ていると、そのように感じさせる諸君がいる。もちろん、服装、態度、話し方等接していて好感を抱かせてくれる諸君も多い。将来にたのもしさを感じる。

「子曰く、吾十有五にして学に志し、三十にして立ち、……」

学ぶべきことはまだ多い。無限にある。謙虚に 学ぼう。

自省の意をこめてこの文章を書いた次第である。



— 大手前高校 教育研究誌 **「はくる」** 掲載【巻頭言】 —

「はくる」 第53号（昭和59年度） 発行／出口 敏雄（校長事務取扱）

【巻頭言】 「はくる」に思う

校長事務取扱 出口 敏雄

昭和二十四年、本誌「はくる」創刊に当たって当時の学院長（兼中学部長）八束周吉先生が書かれた文章の一部を次に採録させていただく。

「教育の対象は若い生命である。機械ではない。その内奥に秘められた生命の永遠性を教育者の理想によって止揚(アウフヘーベン)してゆく営みが教育である。そういう仕事は目に見えないところに気永く生長を営んでいる。若い生命の内容は神の最善の創造であって至妙神秘的な存在である。原子爆弾は造ることが出来ても人の子を作ることは出来ない。

教育者の営みもまた永遠の課題の解決におかれている。それは、かような若き生命の本質を把握しこれに傾倒することである。そしてそこから滲み出る尊い体験が、教育者の理想生の根源となるような生き方にある。ひたすらに内へ内への精進に外ならない。

この微々たる本察しは、かような教育の本筋から逸脱しないための、われわれ同人の内省と思索の断想でありたいと念じ、若き子達の永遠の生命を培う方途を研究する一駒としたい意向のもとに発刊した次第である。」

この発刊のことばに述べられた理想が本校教育の中に百パーセントとはいえないまでも伝統として生き続けてきた。それは、学院報連載の「活躍する先輩シリーズ」の卒業生諸子の文章にも現れている。

昨今はどうだろうか？

まず、日本の教育全体が国外からはその質の高さと平等性という点で高く評価されつつ、国内的に見ればいろいろな矛盾や困難に直面している。受験体制。校・家庭内暴力。学習に対する無気力。等々。それは、子供、親、教師、学校をつつむ環境、社会全体の大きな変化に基因するものであり、本校とてもその例外ではない。

しかしながら、教育は百年の計である。現実が大きく影響されるのみではいけない。混乱の中から進むべき方向を見出し、それに向って計画、実践、精進すべきである。

この察し「はくる」が、その研究の一駒として今後も異議あるものであり続けてほしい。初心をふり返る意味で創刊のことばを抜粋させていただいた。

．．．．．

【巻頭言】 「学力」雑感

学校長 出口 敏雄

昨年12月に17年ぶりの中学生に対する文部省全国学力試験の結果が発表された。国語、社会、数学、理科、英語。各教科共学年別の平均点は60～70点を示し、17年前の結果と比べると大半が10～40点近く上昇しているとのことである。しかし、各教科共暗記型の知識や技能は優れるが、次のような弱点・欠点が指摘されている。

国語……作文力、特に自分の考えをまとめて論理的な文章を書いたり意見文を書く力。

社会……総合・多面的に思考・判断する力。

数学……数学的考え方を見る問題

理科……実物を知らない。実験結果から規則性を見いだしたり、筋道を立てて考えるなど科学的思考。

英語……書くなどの表現力。

進学競争が過熱化している都市部ほど高得点をあげている現象と併せて、受験体制下のテスト偏重の弊害・反映と見、解説（朝日新聞）はこれが即ち「学力向上」といえるか疑問だととらえている。

次に掲げたのは、学校報「活躍する先輩シリーズ」に寄せられたある卒業生の文章の抜粋である。

「振り返って追手門で受けた教育を想起するとき、私にとり有難かったのは、あのリベラルで伸び伸びとした雰囲気の中で、各々の教科を通じて、いわば人文、自然、社会科学の諸分野の基本的な発想法とその面白さ、その独特の論理とそれに見合った勉強の進め方の基礎を教えていただいたことである。人生のうちで最も感性が伸び、何でも吸収できる柔軟性を持っていた時期に、情熱をこめて各教科の魅力を説いていただいた。その要素によって、高校末期の本格的「受験勉強」がどれほど楽になったか、また大学での学生生活がいかにスムーズに送れたか、…（略）…その恩恵ははかりしれない。

戦後本校の教育は当時の八束周吉学院長のもと、中正・堅実を教育の方針として歩み続けてきた。その教育の内容が先の卒業生の言葉に表れていると思う。そうして、これこそ時代を超えて変わらなく真の基礎学力といえるものであり、多くの父兄がそれを求めて子弟を本校に通学させて来たものと確信している。

爾来四十年。社会の変動、教育界の変動の中で、本校もまたゆれ動かざるを得なかった。しかし、先の伝統は薄れたといえ、今も尚本校の教育の中に残り続けている厳しい教育環境の中ではあるが、私たちはこれを今後も大切に、更に発展・拡充して行きたい。そのための研鑽を日々怠りなく続けて行きたい。

.....

「はくる」 第55号（昭和61年度） 発行／出口 敏雄（学校長）

【巻頭言】 「学問の厳しさ」

学校長 出口 敏雄

歳と共に低下する読書力を何とか食い止めようと、疲れた時は軽い小説類を挟むなど、読書週間の維持に努めているが、毎年、年初の第一冊目は、その選択について考えることにしている。

今年は「回想 河野与一・多麻」（「河野先生の思い出」刊行会発行）を選んだ。河野与一・多麻夫妻追悼の文を集めたものである。与一氏は「アミエルの日記」「プルターク英雄伝」などの翻訳者として知られているが、著作は少なく、わずかにその随筆など小文を集めた「学問の曲り角」「続学問の曲り角」（岩波書店発行）などがあるのみ、又、多麻夫人も「宇津保物語」（日本古典文学大系 岩波書店発行）などその著書は少ない。

知人、門下、親戚など百名近い人それぞれの文章を通読することにより、夫妻の非常に広く多く多彩な交際範囲、しかも、その一人一人に対して常に細やかな心遣いと深い愛情をもって接しられた人間性が浮かび上がり 大きな感銘を受けた。

与一氏は哲学者であると共に、「語学の達人・天才」と称せられ、十五ヶ国語、それも古典語のみならず現代語にも明かるく、外遊の際など、フランスではフランス語、ギリシャではギリシャ語でよどみなく会話され、いろんな分野の学者や翻訳家が外国語の中に疑問・疑義を感じて教えをこわれた時、氏はそれに対する確に答え、解決を与えられたという。

氏は抜群の記憶力を持っておられたようだ。私の記憶力は覚えてもしばらくするとほとんど忘れてしまうように短い、氏の記憶力は覚えたが最後、消えなかったようだ。

しかし、氏の達人・天才は決して氏の天性の才能のみによるものではない。人一倍、いや、常人には全く真似の出きないような努力精進をされたようだ。語学の上達ぶりに驚いて、「何か特別な秘訣が？」と聞かれるたびに、「そんなものはないよ。毎日、時間をかけるだけだ。嘘だと思うならそばで見ていてごらん」と答えられ、そのことは多麻夫人も「河野の努力にはかなわない」と認めておられたようである。一例をあげると、毎日ホメロスの原典を1日78行（100行と書かれている方もある。一年で読了）、それはどんなに夜遅くとも、又、お酒を相当飲まれた後でも、怠りなく続けられ、亡くなられる数年前に病气入院された時は、いい機会とロシア語でトルストイの「戦争と平和」のおさらいははじめられ、退院後も続けられ一年で読み終えられたという。

何人かの方が「河野氏は学問を一生楽しんだ」と書かれているが、氏の学問に対する姿勢は峻厳である。「勉強は強いて勉めると書くのだ」といわれている。

与一氏は昭和59年7月、87才で、多麻夫人はその跡を追うように翌61年1月、89歳で亡くなられた。私がおの歳まで生きるとすれば、まだ30年近くあることになる。冒頭、「歳と共に低下する読書力云々……」と書いたが、昨今の我が身を省みて忸怩たるものを感じる。

.....



「はくる」 第56号(昭和62年度) 発行/出口 敏雄(学校長)

「巻頭言」

学校長 出口 敏雄

昨年11月、教育課程審議会は「幼稚園から高校までの教育課程基準改善」のまとめで、生活科新設の方針を打ち出した。現在の学校教育は知識の伝達に偏りがちである。自分の身体で生活体験する機会が少ないとの指摘から、特に小学校低学年でその必要性を考え打ち出されたものである。

小学校に限らず寺子屋の昔より学校教育は知識の伝達、間接経験学習の場であった。しかし、従来は家庭生活が、その中で子供たちがいろいろな仕事を分担することにより直接体験学習の場となり、また、自然は豊かにふれ合いの場を提供していた。機械化、合理化が進み、家庭での直接体験の場が狭められ、自然も人為的、人工的なものに変化することにより、そのバランスが大きく崩れ、前記のような方針が打ち出されるに至ったものと思われる。

私たちの学院は偕行社附属小学校の頃より、高い学力を求めると共に、時代を見通し、先取りする気風があった。「はくる」本号にも、海外研修、高校社会科での実地学習等が報告されることと思う。また、集中体育・集中家庭、多彩な各種行事はいずれも生徒たちの貴重な直接体験の場となっている。「はくる」本号をそのような目で読んでいただきたい。

.....

「はくる」 第57号(昭和63年度/平成元年1月発行) 発行/出口 敏雄(学校長)

【巻頭言】 生涯学習 ―「我が国の文教施策」を読んで―

学校長 出口 敏雄

昨年の末に文部省より昭和63年年度白書として「我が国の文教施策」が発行された。サブタイトルには「生涯学習の新しい展開」となっており、第一部をその問題に割いている。

先の臨時教育審議会答申で、今後の教育改革の基本的な視点として、生涯学習体系への移行を図ることが提言されて以来、生涯学習の問題が新聞、雑誌、テレビ等で種々議論提案されている。

生涯学習の重要性が提言された背景は、我が国の教育全体のあり方を問題とする立場が第一にあるが、白書も指摘しているように、個々人としても、自己教育力として次の2点よりそのことが要請される。

一、科学技術の進歩、産業構造の変化、国際化、情報化の進展などに伴い、絶えず変化し、新しくなる知識・技術を修得する必要性。

二、所得水準の向上、自由時間の増大、高齢化等が進行するに伴って生ずる学習意欲の増大。

もちろん、「生涯学習」という用語こそなかったが、従来からその必要性は通観されてきた。上記の如き社会変化の急進展がよりそれを声高にさせたのであろう。

私自身、十年前、二十年前、……と比べてそのことを痛感する。例えば、読書。書店の書棚、あるいは新聞の広告を見るとき、以前はその選択の分野が非常に限られていたが、最近はそれが広が

り、あれも、これも多いと思うことが多い。しかし、読書時間の限界を考え買いひかえるというのが現状である。それでも、諸分野にわたって積んだままという本がふえている。(私の年間読書量はここ数年七十〜八十冊。読まずじまいに終わる本もかなり出ることであろう。)

右は読書についてであるが、白書でもとりあげているような欧米諸国並の生涯学習機関、機会が、我が国でももっと充実してほしいと願うのも、その気持ちからであろう。

次に白書は「生涯学習における学校の役割」について触れている。「学校教育は生涯学習の基盤を培う重要な役割を持っている」と述べ、その役割は「主体的に学ぶ意志、態度、能力の育成である」としている。単に知識や技術の伝達ではなく、発達段階に応じて必要な知識や技術を確実に身につけさせることを通して、思考力、判断力、表現力などの能力を育成しなければ、ということである。

何等、事新しいことではなく、より一層の重要性和質的充実を目指しているわけである。昭和六十七年度(平成四年)から実施を目指す新教育課程にその事も盛り込まれるとのことであるが、その実現に必要な種々の条件や環境づくりに対する施策も併せて期待したい。

更にそのことは、国の施策を待つのみでなく、私たちの学院としても検討、実行すべきであり、教育研究所の公開講座はその魁といえるものであろう。

.....

「はくる」 第58号(平成元年度) 発行/出口 敏雄(学校長)

教育者の姿勢 ―ヘレン・ケラー自伝を読んで―

学校長 出口 敏雄

「両腕いっぱいカーネーションの花を抱え、頬にはいかにも田園の生活をしている者らしいいきいきした色を湛え、大きな黒い瞳をして、黒い髪の毛を後で束ねている女たち、また、美しいゼラニウムの花を入れた籠をさげて、小鳥のように楽しげに語り合っている子どもたち、……」

これだけを取り出せば、特にとりたてて言うほどの文章ではないが、実は盲・聾・啞と三重苦の生涯を生き抜き、奇跡の人と称された、ヘレン・ケラー自伝「私の生涯」(岩橋武夫訳、角川文庫)の一節である。

昨年、新潮選書の一冊として「大人のための偉人伝」(木原武一著)が出版された幼少年時代を偉人伝に親しんだ世代の一人として購読、更にその中の何人かについて自伝を購入した。前記「わたしの生涯」もその一冊である。

ヘレン・ケラーの生涯は、映画・演劇としても上映、上演されているが、今回この自伝を読んで、ヘレン・ケラー自身もさることながら、その師アン・メイシー・サリバン女史の生涯に多大の感銘を受けた。ヘレン・ケラーの自伝であり、サリバン女史のその時々的心境は何等直接に語られてはいないが、その努力、苦悩が想像を絶するものであったことが察せられる。

女史が満七歳にも満たないヘレンの元にやって来た時、まだ彼女自身も若く、教育の経験も乏し

い一女性にすぎなかった。その彼女に三重苦のヘレンの教育に当たるのである。

物にはそれぞれ名前があることすら知らなかったヘレンに、初めてそれをわからせる次の場面は感動的である。井戸から水を汲み上げている樋口の下にヘレンの手をおき、冷たい水が勢いよく流れている間に、別の手を初めはゆっくりと、次には迅速に「水」という語をつづて行く。彼女が来て幾週間目かのことであった。

特に私が心を打たれるのは、彼女の教育が単なる知識の教育のみでなく、ヘレンの心に美と愛の精神を育てて行ったことである。後年、ヘレン自身、不自由な身を省みず心身障害者の幸福のために、休養のいとまもない程勢力的に活動を続け（日本にも前後3回訪問）、その生涯を捧げつくすことになるが、その精神はサリバン女史より体得したものである。ヘレン自身、次のように書いている。「先生は、自分のような者のために、その一生を捧げきって死んでいかれた。それこそ完全な奉仕の生涯である。残された私こそ、その連続でなければならない」と。

子供を教室に連れてくることは、どんな教師にでもたやすいことであるが、しかし学ばせるということは必ずしもどんな教師にもできることではない。特に最近「無気力、無感動」的傾向の強い子供たちを前にして、私自身日々苦慮するところであるが、自分の教育法に欠陥があれば直ちに気づき、改め、あるいは新しい方法を開拓して行くサリバン女史の生涯に、激しく鞭打たれる思いである。



演劇活動（演劇部顧問）

－「はくる」 第45号（昭和51年度） 発行／阪口 親平－

戯曲「祭り囃子のひびく頃」 出口敏雄

——幕閉じる——

水車小屋／お爺さんのお経（自隠禅師 坐禅和讃）／出口 敏雄

衆生本来仏なり 水と氷の如くにて 水をはなれて氷なく 衆生の外に仏なし 衆生近くを知らずして 遠く求むるはかなさよ たとえば水の中に居て 渴を呼ぶが如くなり 長者の家の子となりて 貧里に迷うに異ならず 六趣輪廻の因縁は 己が愚痴の闇路なり 闇路に闇路を踏みそえて いつか生死を離るべき 夫れ摩訶衍の禪定は 称歎するに余りあり 布施や持戒の諸波羅密 念仏懺悔修行等 其品多き諸善行 皆この中に帰するなり 一座の功をなす人も 積みし無残の罪ほろぶ 悪趣いづくに有ぬべき 浄土即ち遠からず 辱なくも此の法を 一たび耳にふるとき 讚歎隨喜する人は 福を得ること限りなし いわんや自ら回向して 直に自性を証すれば 自性即ち無性にて すでに戲論を離れたり 因果一如の門ひらけ 無二無三の道直し 無相の相を相として行くも 帰るも余所ならず 無念の念を念として 謳うも舞うも法の声三昧無礙の空ひろく 四智円明の月芽えん 此の時何をか求むべき 寂滅現前する故に 当処即ち蓮華の国 此の身即ち仏なり。

．．． ．．． ．．． ．．． ．．．

戯曲 「赤い小函」 出口 敏雄

（と き） 現 在
（と ころ） ひろみの家の応接室 および 中学校の教室
（登場人物） 山根ひろみ
山根景子（ひろみの従妹）
ひろみの同級生 勝盛（女子）
佐竹（ ♀ ）
正木（ ♀ ）
小林（ ♀ ）
堀（ ♀ ）
阪井（ ♀ ）
平島（ ♀ ）
青木先生……出口敏雄

解 説
校内放送の声

音楽 林光作「原爆小景」より「水ヲクダサイ」

－ 幕 開 く －

スクリーンに スライドが映し出される。
1 枚目「ヒロシマ上空の原子雲

解説 1945年 8 月 6 日 午前 8 時15分。広島上空で 初めての原子爆弾が 人間を
殺戮する目的のもとに投下されました。わずか 1 キログラムのウラニウムを核
とした原子爆弾でしたが、580メートル上空で 摂氏80万度の太陽となって
人びとを焼き殺し 押しつぶし、街中を燃え上がらせました。

スライド 変わる。
「私は見た！ 市民が描いた原爆の絵」より何枚か。

音楽 止む。
解説 あの日から、35年の歳^{と き}月が過ぎ去りました。

スライドが消え、舞台の照明がつく。

（舞 台） 上手 ひろみの叔父の家の応接間（応接セット）
下手 教室の一部（生徒用机・椅子 それぞれ数個）

プロローグ 応接間

ひろみ、上手より悄然と入ってくる。

静かに椅子に坐り、鞆の中から赤い小函を取り出し テーブルの上に置いて眺める。（小函は少しつぶれている）

－ 間 －

景子、上手より、足早に入ってくる。

景 子 ひろみちゃん！ 悪かった？

ひろみ ……………。

景 子 （小函をとり上げ眺めながら）つぶれたね。

－ 間 －

－ 暗 転 －

校内放送 三年生の修学旅行の歌集委員に連絡します。只今から歌集を綴じる作業を行いますので、今すぐ 一組の教室に集まってください。繰り返します。
……………

教 室

放課後の教室。

勝盛 佐竹 正木 小林の四人が 机を寄せて「旅行のしおり」のための資料調査を行っている。勝盛が読み、正木が書いている。

勝 盛 死者推定 約二十万人。爆心地から距離500メートル以内の死亡率98.4パーセント。

正 木 （書きながら）98.4パーセント。

勝 盛 1キロメートル以内で、90.0パーセント。

堀 阪井 平島の3人が下手より入ってくる。

堀 お前ら まだやってるんか。

佐 竹 うん、あんたらは？

阪 井 これから 綴じるんや。

平 島 今、放送で呼び出してたやろ、歌集委員を。

勝 盛 ふうーん、ええなあ。もう 綴じるだけなんて。

小 林 歌集委員は 歌を選ぶだけやから楽。

阪 井 お前ら どこ調べてるんや？

正 木 広島。

勝 盛 ゆううつな資料ばかりで 面白くないわ。

佐 竹 同じ調べるんなら、津和野か萩。萩を調べたかった。

平 島 各班 抽選で決めたんやから、しょうないやろう。

堀 広島も大切やで。先生がいうとったやろう。

「原爆を受けた 唯一の国民として、広島、長崎は ぜひ知っておく必要がある。」

阪 井 「原爆は 決して過去のものとは違う。現在では もっとすごい威力の原爆、水爆をアメリカ・ソ連だけでも 何万発と所有している。」

佐 竹 わかってる。ただ 萩の方を調べたかったって いうてるだけ。

堀 お前らの班 これだけか？

小 林 ううん、あと 山根さんがいる。

堀 そうすると、4 人半か。

小 林 4 人半？

堀 わからんか？ 一人、二人、三人、（と、勝盛 佐竹 正木と数え）それに山根で四人。それに、（小林を指さしながら）お前で四人半や。

小 林 こら！

小林 逃げ回る堀を追いかける。

平 島 おい！ やめとけ、やめとけ！

小林 追い回すのをやめる。

平 島 遅れるぞ。さあ、行こう。

小 林 （堀に向かって）覚えとりや！

堀 覚えてるぞ。

堀、阪井、平島の三人 下手に去る。

正 木 さあ、続けよう。

佐 竹 山根さん 遅いねえ。学級日誌 職員室へ持って行くいうて出て行ったきり。

勝 盛 うん。どこかで さぼってるんよ。……大体 あの子は非協力的。何やかやいうて 放課後残ったことない。……今日はめずらしく残ったと思ったら、これ。

佐 竹 今日は 日直で仕方ないからよ。

正 木 でも 掃除なんかは協力的。こんどのことだって初めの間に残ってた。

勝 盛 とにかく 面白くない子や。一寸陰気で。

同じ班なんで 旅行が思いやられる。好きなもん同志で 班組ませてくれたらよかったのに。

佐 竹 中二の終りやったね。あの子が転校して来たん。

正 木 うん。そういえば 広島からとちがった？

小 林 広島？

景子 下手から現れる。

景 子 すみません。山根ひろみ もう帰りましたか？ 私、中一の山根景子です。

佐 竹 あんた 妹？

景 子 いいえ、従妹です。

佐 竹 ふーん。
正 木 山根さんまだ残ってるよ。
景 子 そうですか。
勝 盛 どうかでさぼってるわよ、あんたの従妹。こんどの旅行の調査に ちっとも協力せえへんのよ。こんど会うたら いうとき。
景 子 （ためらいがちに）それは、……
勝 盛 それはって、何かあんの？
景 子 いいえ、何もあります。失礼しました。又、あとで来ます。

景子 去る。

正 木 山根さん、あの子の家にいるんよ。
佐 竹 ふーん。お父さん・お母さんは？
正 木 よう知らんけど、亡くなったらしい。
佐 竹 ほんと？
勝 盛 とにかく 面白くない子や。勉強は一寸出きるけど。
佐 竹 でも、勉強が出きる子には 先生甘いからね。少し位 悪いことしてもおこられへん。
小 林 そう。特に、青木先生なんか、完全に甘い。
勝 盛 ねえ、知ってる？
正 木 知ってるって、何を？
勝 盛 あの子の持ってる 赤い函。
正 木 赤い函？
佐 竹 そう、これ位の。（と、手で大きさを示す）
勝 盛 授業中 時々 その函を机の中でさわってんのよ。
私の席、あの子の斜め後でしょう。よく見えるの。
佐 竹 私も よう見る。
正 木 何が入ってんの？
勝 盛 わかれへん。「その函 何？」って 一度聞いたら、むつかしい顔して見やんねん。
小 林 男の子の写真とちがう？
勝 盛 写真やったら あんな函に入れるかいな？ 定期入れにでも入れるよ。
小 林 そうか……。
勝 盛 何か大事な物が入ってるみたい。
佐 竹 何 入ってんのか、見てやろうか。

佐竹、山根の机の中をのぞき込む。

佐 竹 ない。鞆の中かな？

佐竹、鞆の中をのぞく。

正 木 マミ、やめとき！ 鞆の中まで。

佐竹、正木のことばを無視して 函を取り出す。

佐 竹 あった。これよ。(函をふってみて) ガサガサって音がする。やっぱり 写真とはちがう。(と、開けようとする)

正 木 マミ、やめとき！

ひろみ 現われる。

ひろみ (佐竹の手にしている小函を見て) 佐竹さん！

ひろみ、小函をとり返す。(小函、その時 少しつぶれる)

ひろみ 他人^{ひと}の鞆の中の物、勝手に出しているの！

佐 竹 一寸 見せてもらっただけ。

勝 盛 ねえ 山根さん、中に何が入ってんの？

ひろみ、無言のまま 函を大事そうに鞆に入れ、帰り支度する。

勝 盛 一寸 待って。帰んの？

ひろみ、無言のまま 立ち去ろうとする。

勝 盛 (ひろみの前に立ちふさがって) ねえ！ 旅行のしおりの原稿 どう考えてんの！ 締切りまで あと3日よ。

ひろみ ……………。

勝 盛 マミが あんたの鞆 勝手に開けたんは悪かった。

マミ、あやまり。

佐 竹 ごめん。

勝 盛 私も 止めへんかった責任感じるから あやまる。ごめん。

ひろみ ……………。

勝 盛 それで、函のことはそれとして。しおりの方よ。あんたちっとも協力せえへんやないの！

ひろみ ……………。

勝 盛 ねえ、山根さん！

ひろみ ……………。

勝 盛 黙ってんと、何とかいうたら！

ひろみ 調べたくないのよ。

勝 盛 調べたくない？

佐 竹 どうして？……………。

勉強にさしさわる、いうの？

ひろみ ……………。

勝 盛 そんな勝手なこと。

青木先生、現れる。

青 木 まだ 頑張ってるのか？

青木先生、その場の異様な空気に気づく。

青 木 どうした？

一同無言

青 木 どうしたんや？ 勝盛、いうてみ。

勝 盛 山根さんが 旅行のしおりの作成に ちっとも協力しないから 理由をたずねているんです。

佐 竹 勝手なんです。放課後 居残ったことないんです。

勝 盛 理由を聞いたら、「調べたくないのよ」です。そんな理由通りますか？

平島、入ってくる。その場の様子を眺める。

青 木 山根、どんな理由があるか知らんが、協力せないかん。

ひろみ ……………。

青 木 山根。

ひろみ ……………。

青 木 まあ一度、皆で話し合えよ。君たちの問題やからな。ええな。

青木先生 立ち去ろうとする。

勝 盛 青木先生！ 待って下さい。

青 木 ……………。

勝 盛 先生、山根さんに甘いです。今だってそうです。もし、私や佐竹さんやったら、もっときついことばでいうたと思います。

青 木 ……………。

勝 盛 それに 先生は 山根さんの赤い函のことも 知ってて知らんふりしています。

青 木 赤い函？

佐竹、ひろみの鞆の中から 小函をむりやりとり出す。

正 木 マミ！（と、やめさそうとする）

佐 竹 （とり出して）これです。

景子、入ってくる。

勝 盛 山根さんが 授業中、その函を時々机の中でさわってのんを先生も知っているはずです。……昨日も そうでした。先生、気づいてて 知らん顔しています。

青 木 ……………。

佐 竹 学校へ 何を持ってきてもいいんですか？

平 島 授業のじゃまになってるわけやなし、ええやないか。

勝 盛 あんたは 黙っとり！
何が入っているか 先生 知ってるんですか？
青 木 ……………。
佐 竹 玩具かも知れません。学校へは 玩具やマンガの本を持って来てはいかん
ことになっています。先生はこの間、私がこっそり読んでたマンガの本を
とり上げました。
勝 盛 そうです。
青 木 ……………。

—— 間 ——

青 木 山根。その函、何が入ってるんや？
ひろみ ……………。
青 木 ええ、山根。
ひろみ ……………。
景 子 （それまでいらいらしていたが、意を決して）お骨です。
一同、驚く。

景 子 原爆症で亡くなったんです。
正 木 原爆症？

ひろみ、たまりかねたように 小函を鞆に入れ、足ばやに立ち去る。

—— 間 ——

景 子 伯父さんと伯母さん、あの8月6日、広島にいたんです。
……伯父さんと伯母さん、被爆者同志の結婚です。……病気一つしない
元気な伯父さん・伯母さんでしたが、昨年の秋に伯母さん、そして この
冬に伯父さん。2人共 原爆症の「がん」で亡くなったんです。

一同、無言。

景 子 （勝盛たち4人にむかって）先輩。ひろみちゃんが協力しないのは、先輩た
ちが 遊び半分だからです。真面目でないからです。

景子、ひろみの後を追うように立ち去る。
一同、沈黙。

—— 暗 転 ——

校内放送 下校時刻です、下校時刻です。まだ校舎内に残っている用事のない生徒は
直ちに下校してください。……………

エピローグ 応接間

ひろみ、景子、プロローグと同じ位置

—— 間 ——

景 子 （小函を静かに置き）いい 伯父さん・伯母さんだったものね……伯母さん 先に亡くなって、お棺のふたを閉める時、伯父さん、伯母さんの頬に そっと口づけしたでしょう。私、忘れられない。

ひろみ ……………。

景 子 伯父さんに、「伯父さん・伯母さん 被爆者同志で どうして結婚したんですか？」て、聞いたことがある。

ひろみ （はっとして）お父さん、何ていったの？

景 子 はじめ 笑っておられたけど、まじめな顔になって、「私ら二人、はじめは あの日 偶然生き残ったって思っていたけれど、そうでなく、本当は生き残されたのだ。それがわかったからだよ」って。

ひろみ 「生き残ったのではなく、生き残されたのだ」って？

景 子 そう。

ひろみ ……………。

—— 間 ——

玄関のチャイムの音が聞える。

景 子 （声）はい。

しばらくして 景子に案内され、勝盛たち四人が入ってくる。

勝 盛 山根さん、さっきはごめんね。

ひろみ ……………。（四人に気づかない）

佐 竹 ごめんね。

ひろみ （ハッと勝盛たちに気づき、ふっ切れたように 明るく）いいのよ。私も悪かった。明日から一緒にやる。

勝 盛 ほんと？

ひろみ うん。

正 木 よかった。山根さんが一緒にやってくれたら、きっとすばらしいしおりが出きるわ。

景 子 （明るく）お茶入れてきます。

景子、立ち去る。

正 木 それからね。みんなで 千羽鶴を折る話が出たの。明日の朝のホームルームで 勝盛さんが提案する。

勝 盛 他のクラスも呼びかける。

小 林 青木先生も「協力する」って。

ひろみ ありがとう。

佐 竹 それから、これ、今 買ってきたの。(と 紙包みを渡す)
さっき、その函 つぶしたでしょう。この函、使ってほしいの。

ひろみ ありがとう。……でもね。

正 木 どうしたの？

ひろみ ありがとう。……でもね。

正 木 どうしたの？

ひろみ こんど お墓参りした時、このお骨、全部お墓に入れようと思うの。

四 人 ……………。

ひろみ こんな函に入れて持ち歩いていたら、お父ちゃん・お母ちゃん、安らかに眠れないでしょう。(と微笑む)

佐 竹 では それまでの間、この函を。

ひろみ うん、では そうさせてもらう。

ひろみ 紙包みを開ける。

景子 お盆に 湯呑みをのせて 入ってくる。

景 子 麦茶ですが ……………

四 人 ありがとう。

四人 お茶を飲む。

玄関のチャイムの音が聞える。

景 子 はい。

景子、立ち去る。

しばらくして 景子に案内されて 平島たち三人が入ってくる。

平 島 どうや？ 心配でな。

勝 盛 うん、ごめんね。

正 木 山根さん、明日から 私たちと一緒に調べてくれるって。

平 島 ほんとか？ それは よかった。

阪 井 歌集 出きたぞ。お前らの分 先に持ってきたった。

阪井 鞆の中から 歌集をとり出し みんなにくばる。

勝盛たち ありがとう。(と、頁をくって眺める)

堀 (湯呑みを見て) お茶か。ジュースは出えへんのんか？

景 子 ジュースですか？

小 林 この子ら 水でええのよ。

堀 水？ こら！

平 島 おいおい。やめとけよ。

正 木 ねえ、今 みんなで 何か歌わない？

佐竹／勝盛 賛成！

- 1980. 11 -

私は、常に部員の性格等を考えながら脚本を書くことが多いが、今回は脚本が出てからキャストを考えるということになった。しかし、生徒達はすばらしい可能性を秘めていた。大阪府中学生演劇祭では見事な舞台を作り上げてくれた。ただ、脚本としてはドラマ性に乏しいこと他、種々難点があることは劇作研究会でも指摘された。機会があれば全面的に書き改めてみたいと思っている。

木崎博士には了解をいただく意味で学校祭前に第一稿をお送りしてところ、早速お返事に併せて、「秀頼の首」後日談ともいふべき著書「大坂城余燼」（ヘルス研究所刊）をいただいた。それによると明石掃部助は大阪落城後四国土佐に落ちのびたことが確かめられている。

秀頼（？）の頭蓋骨は現在京都嵯峨の清涼寺釈迦堂脇に「豊臣秀頼公首塚」として埋葬されている。昨年末、半日をさいて尋ね、その前に線香を手向けた。厳寒のこの冬にめずらしい小春日和ともいふべき日であった。

(1984. 1. 18)

．．． ．．． ．．． ．．． ．．．

－『群れの人びと』出口 敏雄先生 追悼文集－

「群れの人びと」 作 出口 敏雄（一幕）

時	1994年 秋のある日。
所	大阪天王寺公園および動物園近くの路上。
舞 台	上手に、ベンチ。その側にカラオケ装置が置かれている。 下手に、露店（たこ焼き）の屋台。看板、貼り紙などが見られる。
登場人物	かたぎり 片桐 とみじ 十三二 まみ 真美（十三二の孫） たかひろ 貴浩（ 〃 ） ちゅうじ 加藤 忠治（十三二の友人） しょうへい 林 昭平（路上の仲間） かよ 山田 加代（路上の仲間） きみえ 石本 君江（ 〃 ） あきこ 細川 昭子（ 〃 ） たかこ 津島 孝子（ 〃 ） いっぺい 阿部 一平（屋台の青年）

〔上演にあたって〕

1945年に太平洋戦争が終わって49年、戦後生まれの人達が戦争体験者を大きく上廻るようになりました。激動の戦中・戦後を生き抜いてきた人達の多くは、今社会の第一線を退き、それぞれの余生を過ごしています。

天王寺から新世界へ、天王寺公園に接する道路上にそうした人達が集まってカラオケをバックに歌ったり踊ったりしています。片桐十三二、通称トミさんもその一人です。

第44回「大阪府高等学校演劇研究大会」プログラム（大阪府高等学校演劇連盟／1994. 10）

．．． ．．． ．．． ．．． ．．．

「大阪ラブソディー」の歌が聞こえ始める。

— 幕 開 く —

カセット装置から流れる「大阪ラブソディー」の歌に合わせて、君江、昭子、孝子たち 路上の仲間たちが踊っている。

踊りが終り、次いで加代が、カラオケの曲に合わせて「岸壁の母」を歌う。

歌い終えた加代。それに、君江、昭子、孝子、昭平、ベンチ、あるいは屋台の腰掛けを持ち出すなどして、腰をおろす。

一平、下手より現れる。

一 平 お早よう。

昭 子 一平ちゃん、お早よう。また、腰掛借りてるよ。

一 平 あいよ。

一平、言いながら、持って来た荷を開くなど、屋台の店を開ける準備を始める。

孝 子 一平ちゃんは、働きもんやね。

昭 平 腰掛け、新しくなったんやな。

一 平 前のが古くなって、ガタガタやったんでね。

君 江 (吊るしたビラを見て) タコ焼き、八個百円になったんかい？

一 平 そう、競争が激しくってね。

孝 子 がんばってかせがな、嫁も来てくれへんで。

君 江 そうそう。この頃の女の子は、私らの若い頃みたいに、しおらしいからなあ。

昭 平 誰が、しおらしいて？

君 江 なんか、文句あるんか？

加 代 そう言うたら、こないだ、そこの近鉄で、一平ちゃんが髪の毛の長い女の子と、腕組んで歩いてたん、見たで。

昭 子 そやそや。モロゾフのプリンなんか買うて。

加 代 どこで食べたんや？

一 平 小母ちゃんこそ、いらんこと言うてたら、トミさんに嫌われるで。

君 江 あんたこそ、逃げられんようにしいや。昭平さんみたいに。

昭 平 一人もええで、結婚なんてするもんと違う。

一 平 小母ちゃんには、かなわんわ。……あっ！ しもた。アキさん、またしばらく頼むわ。

昭 子 あいよ。また買い忘れか？行っといで。

一 平 じゃあ。

一平、下手に去る。昭平たち、それぞれにくつろぐ。

昭 子 カヨさん、さっきは、えらい珍しい歌を歌^{うた}てたね。「岸壁の母」。

加 代 何や、今日は、歌いたかったんや。

アキさんには、わからんやろなあ。「岸壁の母」の気持ち。

昭 子 アホぬかせ。私かて人の親や。子を思う母親の気持ちぐらいわかるわ。
君 江 アキさんとこは、子供が親に気をもんでるんと違うか。
孝 子 いつ、何をしでかすかわからん言うてか？
昭 子 私はな、この弱い腕で、あの息子を育ててきたんや。
ちーとは心配でもしてもらわな、割あわへん。
昭 平 アキさんのそのたくましい腕やったら、もう二人、三人、バカ息子育てられたんと違うか？
昭 子 だーれが、バカ息子や。私のところのせがれは、あんたみたいに、ほんくらには育ってないで。まあ、トミさんほど、インテリ言うんか、そないなもんにも育ってないけどな。
君 江 トミさんと、あんたとこのバカ息子と、比べる方が間違てる。
加 代 (上手奥を眺めながら) そやけど、トミさん、今日はえらい遅いなあ。
昭 子 おや、また、「ト、ミ、サ、ン」。
君 江 今日、将棋クラブやで。
加 代 こんなええ天気の日、行けへん。
昭 平 さすが、カヨさん。トミさんのこと、よう知ってる。
昭 子 なんせ、ほれてるもんなあ。よっしゃ、色恋のことは私に任せとき。あんじょうしたる。
君 江 あまり任せられへんで。中には失敗したんもあるよってな。私のときみたいに。
孝 子 なんや。キミさんとこまとめたんも、アキさんか。
昭 平 キミさんは、昔、そこの新世界で踊ってたんやろ。
君 江 そや。ことわとくが、踊り言うても、ストリップと違うで。
昭 平 わかってるわ。キミさんやったら、ストリップは無理やろ。
君 江 何？ 私のはだか、見たことあるんか？
昭 平 見んでもわかる。
君 江 勝手に想像せんといて。まあええ、踊りだけやないで。芝居も。一座の花形や。
(坐りこんで、芝居のせりふ)
「知らざあ言って聞かせやしょう。」
加 代 (大向からの声の調子で) よお、キミエさん！
君 江 「浜の真砂と五右衛門が 歌に残こせし盗人の 種は盡きねえ七里ヶ浜、その白浪の夜働き、以前を言やあ江の島で年季勤めの兒ヶ淵、……」。
昭 平 白浪五人男、弁天小僧やな。
さすが、昔とった杵柄、大したもんや。
君 子 せりふ、よう覚えてるね。
君 江 昨日、一昨日のことは、すぐ忘れるようになったけど、昔のせりふははちゃんと覚えてる。お客さんがこの襟に、千円、二千元とおひねりを、よう入れてくれたもんや。
ライスカレーが百円、親子丼も百円で食べられた時代やで。

昭 平 キミさん、華^{はな}やかなりし、栄光の時代。
君 江 そうや。(と、得意顔)
死んだおっさんが、せんど見に来てくれたんや。ひいきにしてくれてな。
昭 子 私のそこへ、何度も「キミさんと一緒にになりたい。何とかならんか」て、
言うて来てな。
君 江 アキさんのすすめもあったし、みてくれもまあまあと思って、一緒になった
んが、(セリフ調で)「君江さん、一生の不覚」。
えらい極道者^{ごくどうもん}でな。酒は一升酒。飲んで荒れて、私を殴る、蹴る、青
痣^{あざ}絶え間なしさ。
加 代 キミさんを殴るなんて、大した男や。
孝 子 別れりゃよかたんよ、そんな亭主。辛抱なんかせんと。
君 江 うん。この節は流行^{せつ はやり}やけど、……
昭 平 カヨさんには、ええ人おらへんかったんか？
加 代 おったで。ええ男やった。
昭 平 捨てられたんか？
加 代 こんなええ女、誰が離すかいな。
昭 平 ほな、何で？
加 代 聞くと涙、語るも涙の物語。
幼なじみでな。今やったら、アイドル、アイドルちゅんか、東山クンみた
いな顔立ちやった。
昭 平 へえー、東山クン？
加 代 たった1ヶ月やったけど、幸せな結婚生活やった。
孝 子 1ヶ月？
加 代 忘れもせえへん。昭和20年3月13日の大空襲。
昭 子 (思い出すように)ザー、ザーと、音立てて、次から次へと焼夷弾。
孝 子 怖かった。防空壕の中で、震えてた。
君 江 そこら中が火の海。この大阪の街が、ほとんど焼け野原。
昭 平 あの晩だけで、7万発落とした言う話や。
加 代 家が焼けてしもてな、その時に、うちの人も、……
昭 平 そやったんか。
昭 子 たくさんの人が死んだ。あっちにも、こっちにも、黒焦げの屍体。
加 代 焼け残った材木を集めてきて、うちの人の屍体、みんなで焼いたんよ。
手や足が、時々、動いたように見えた。 私も、その火の中へ跳びこもう
と思った。……
今年は、五十回忌やった。
昭 平 そうなるなあ。
加 代 (気をとり直すように) そやけど、長生きはするもんや。また、ええ男に出
会えた。
孝 子 また、トミさんかいな。
加 代 さあー、もう、そんな話やめよ。

昭平さん、一発歌い。
君 江 そや、歌い。昭平さんの十八番を。
昭 平 よっしゃ。行くで。

昭平、カセットを装置にセットし、スイッチを入れる。曲は「スーダラ節」。
昭平、曲に合わせて、歌い踊る。
加代たち、手拍子で合わせる。
十三二と忠治、上手より現れる。

加 代 （十三二たちを目にして）あっ！ トミさん。トミさん。

加代、昭平を押しのけるようにして、十三二に近づく。
昭平、拍子抜けの程。
孝子、装置のスイッチを切る。

十三二と忠治 お早うさん。

加 代 どうしたん？ 今日。えらい遅かったやん。

昭 子 トミさん。カヨさんが、首を長うしてお待ちかね。

加 代 もう、ほんまに、そんなと違うて。
そやけど、どうしたん？ トミさん。

忠 治 四天王寺さんへ、お参りして来たんや。

加 代 チュウさんに聞いてない。

忠 治 へえー、こら、えらい言われよう。
（十三二に）カヨさんは、トミさんの声が聞きたいそうや。

孝 子 なんで、四天王寺さんへ？

十三二 昭和23年の今日は、忠治さんと私がシベリアから引き揚げてきた日。
引揚船高砂丸で、舞鶴港。この日本の土を、何年ぶりかで踏みしめること
ができた日。

昭 平 舞鶴のあの^{さんぽし}棧橋、今年復元されたそうやな。

昭 子 チョウさん、いつか言ってたね。トミさんとは、戦争中、一緒に戦うた仲
やて。

忠 治 トミさんは兵長。わしは、その部下。戦争中も、それから、シベリアの収
容所でも、ずっと一緒やった。

昭 平 カヨさん。さっきの「岸壁の母」、トミさんやチュウさんに聞かせたかつ
たな。

十三二 へえー、カヨさんが、「岸壁の母」を？

加 代 妙に、歌いとなったんよ。

昭 子 カヨさんの想い。テレパシーが通じてた、てとこか。

加 代 （しおらしく）いやあ、照れるわあ。

昭 平 ええ年して、よう言うわ。

加 代 あんた、失礼やな。私はまだ若いんやで。

昭 平 でも、大正生まれやろ。

昭 子 タカさんも、私も、昭和。

ゝ 昭和 昭和 昭和の子供よ 僕たちは
姿もきりり 心もきりり
山 山 山なら 富士の山……
そやから、昭和の昭をとって「昭子」
昭 平 おれは「昭平」
忠 治 昔の名前は単純や。私は、忠義の忠をとって「忠治」。
孝 子 私は「孝子」。親孝行の、孝。トミさんは？
加 代 大正十年三月二日生まれで、「十三二」。
孝 子 何で、トミジなん？
君 江 タカさん。数字を漢字で書けるか？ 十と三と二で、トミジ、やろ。
昭 平 カヨさん、さすがよう知ってるなあ。誕生日まで。
加 代 好いた人の誕生日なんか、基本や。基本、
孝 子 この頃はこりすぎ。読めんような漢字並べて、レイナ、サヤカ、フミカ、
……
昭 子 名前だけやない。近頃の若い親の子育て、なってない。
うちの嫁かてそうや。私が、見るに見かねて言うのと、「お義母さんは、
黙ってて下さい。
昔と今では、子育ての仕方が違うんです」て、えらそうに。
うちの大事な息子を、あのデッカイお尻に敷きよってからに。
昭 平 アキさん、口やかましすぎるんと違うか？
昭 子 違う。そんなことあらへん。
加 代 苦労して育てても、大きなったら、親なんど見向きもせんそうやな。
孝 子 そうや。親孝行なんて言葉、どこへ行ってしもたんやろ。
昭 平 「爾臣民 父母ニ孝ニ 兄弟ニ友ニ 夫婦相和し……」
昭 子 教育勅語やな。
孝 子 うちの息子なんかも、とっくに嫁に取られてしもた。……物のない時代か
ら、苦労して大きして来たんに。……嫁の実家には、しょつ中行ってるく
せに、私の方は知らん顔。……あんな息子や嫁の世話にはなりとうない。
……じじばばの世話までしてもらう、なんて思たら、ゾツとするよ。
昭 子 私や、逆に、最後は呆けて、いやって言うぐらい世話をかけさせてやりた
いよ。あの口だけの嫁に。
孝 子 そんなこと。ほったらかされるだけや。
昭 子 そうなったら、化けて出てやるよ。「ウラメシヤ〜」言うて。
孝 子 アホなこと言いな。
加 代 みんな、何やかや言うても、身内おるやろ。私なんか、誰もおれへん。
ポックリと赴きたいよ。「あっちゃ向いてホイ。こっちゃ向いてホイ。あつ、
シンデレラ」て。その点、トミさんは幸せ者。息子さん夫婦と一緒にやろ。
君 江 お孫さんもいるんやろ。
十三二 うん、二人。ありがたいことやと思てる。この私が、生きていうちに、
孫の顔を見られるなんてなあ。

昭 子 孫は可愛いねえ。
孝 子 うん、可愛い。
昭 子 ペロペロと舐^なめてやりたいぐらい。……あの嫌な嫁から生まれて来たなんて、信じられへん。

十三二、突然、胸をおさえる。

加 代 トミさん！ どないしたん？

十三二、胸をおさえるのを止める。

十三二 大丈夫、ちょっと胸がつまったような感じがしただけ。

加 代 ほんまに？

十三二 うん、大丈夫。

加 代 トミさん、気い付けや。トミさんには、長生きしてほしいよ。

加代、横に置いていた袋から、お茶を取り出し、十三二に渡す。

十三二 ありがとう。（と、お茶を一口二口と飲む）

加 代 トミさん。トミさん、いつもお弁当持って来てるやろ。私、いつも感心して見てるんや。

お嫁さん、よう出きた人なんやね。

昭 平 ほんとは、カヨさんが入れて来たいんやろ？

加 代 あんたは、黙っとり！

昭 平 去年の秋、チュウさんが初めてトミさん連れて来た時、みんな、けったいな人やて言うてたやんか。

君 江 そやったなあ。何で、こんな人を連れて来たんやて思た。

孝 子 とつつきの悪い、私らとそぐわん人。

昭 子 私らとは無縁の人やと思た。

加 代 私は こぎれいな、頭の良さそうな人やと思たよ。

君 江 うそ言いな。

昭 子 それから、毎日来ては、何ももの言わんと、じっと私らの踊り見てた。

君 江 何や、不気味やったで。

忠 治 久しぶりに天王寺駅で偶然出会って、なつかしゅうて、思わずここへ連れて来てしもたけど、まさか、毎日来るようになるとはなあ。

十三二 忠治さんに連れられて、ここへ来て、皆に会った時、びっくりしたんや。

加 代 （昭平に向かって）あんたのそのかっこ、誰がてびっくりするわ。

昭 平 何言うてんね。カヨさんの、年に似合わん、その派手な服こそ、びっくりや。

十三二 みんなの格^{かっこ}子見たからと違う。何か、みんなが生き生きしてるように見えたんや。

君 江 私らが？

孝 子 生き生きと、て？

昭 子 そらないわ。私らは、恵まれへん一人もんばっかりやで。

昭 平 そうや。寄るとさわると、文句ばかり。その文句が、また、すごい。
十三二 それが羨ましかったんや。自分の言いたいこと、言い合えて。
歌てるカヨさん、踊ってるキミさん。みんなが、……。

君 江 ほな、何で最初から、私たちの仲間に入ってけえへんかったん？
加 代 トミさんはシャイやから。
昭 平 シャイですか。
加 代 アホか、あんたは。
昭 子 いつやったかな？ 若いポリさんが来た時。あの時からや。トミさんのこと見直したん。
孝 子 そうや。
(警官の口調で)「こんな所で、勝手に歌ったり、踊ったりしてはいけません。迷惑です。解散しなさい。」

昭 子 トミさんの返答が良かったね。
「どちら様に迷惑をおかけしているんでしょうか？ このあたりには、住宅やマンションが、あまり見あたりませんが？」

昭 平 向う側は公園、こっち側は動物園。ゾウや、キリンや、カバから、苦情が来たて言うんか？

昭 子 「大阪城公園では、『城天コンサート』と称して、若者たちが賑やかにやってるそうですが、たしか、ご許可になったと聞いております。向うは良くて、こちらは駄目ですか？」

孝 子 若いポリさん、ぐっとつまって、
「まあ、ゴミなど出さんように、注意してください。」
で言うて、すごすごと帰って行きよった。

君 江 あんな清々したことなかった。
忠 治 50年前と同じ。いつもはあまりものも言わんと黙ってますが、仲間が窮地に落ちそうになった時は、戦ってくれるんです。

十三二 (照れたように)もう言わんといて下さい。私自信もびっくりしたんですから。あんな感情、とうの昔に置いて来たと思てました。とうの昔に。
……

忠 治 さあ、話はこれぐらいで。……(忠治に向って)忠治さん。
うん。(と、何か言おうとする)

加 代 ねえ、ねえ、トミさん。一ぺん、私とデュエットしてよ。ねえ、お願い！
十三二 デュエット。

加 代 そう。ええでしょう。……それとも、私やったらあかん？

昭 平 えらい積極的やなあ。さすが、トミさんとこの後釜ねらってるだけある。

加 代 そんなんと違う。私はトミサンに、「ブルトリウムラブ」よ。

昭 平 あぶなそうやなあ。それも言うなら、「プラスチックラブ」。

加 代 そう、そのラブ。

十三二 弱ったなあ。歌のうまいカヨさんと、音痴の私とでは。……遠慮しときます。

昭 平 じゃあ、わしが代りに。

加 代 アカン。

昭 子 ショウさん。あんた、この雰囲気^{うと}がわからんのか？

昭平、すごすごと引きさがる。

十三二 それに、今日は、……（と、忠治の方を見る）

忠 治 トミさん。カヨさんと歌たり。わしらの方は、後でええ。

昭 子 「わしらの方は」？？

加 代 ねえ、一生のお願い。

十三二 うわー、嬉し！ おおきに、おおきに。

昭 子 デュエットやったら、「銀座の恋の物語」がええ。

〽心の底まで しびれるような

昭 平 〽吐息^{といき}が切ない ささやきだから

昭 子 あんたとデュエット、したくない。

加 代 やっぱり、大阪の歌がええ。

孝 子 そやったら、（と、考えて）「ふたりの大阪」。

加 代 ええねえ。カセット、誰か持ってる？

孝 子 あるよ。

十三二 歌詞もあるかい？

孝 子 うん。

孝子、ケースの中を探し、カセットを取り出し、セットする。

孝 子 カヨさん、ええよ。

孝子、装置のスイッチを入れる。

「ふたりの大阪」の曲が流れ始める。

仲間たち、拍手する。

昭 平 （前奏の間に）それでは皆様。只今より、山田加代さんが、愛しい愛しいトミさんと、デュエットいたします。曲は、「ふたりの大阪」「ふたりの大阪」。

加代と十三二、十三二は歌詞を見ながら、歌い始める。

真美、下手に現れる。下校の途中と見え、制服姿、通学鞆を手にしている。

真美、十三二たちの歌う様子を、じっと見つめる。

十三二、ふと、下手の真美に気づき、ギクツとして、歌を中断する。

加 代 （歌を中断し）トミさん、どうしたん？

加代、十三二の視線を追い、真美の存在に気づく。

加 代 トミさん、あの子？

十三二 ……。

真 美 お祖父ちゃん！ 将棋クラブと違たん？

十三二 ……。

真 美 こんなところで、歌なんか歌て、恥ずかしくないの！ こんなけったいな小お

婆さんと。

十三二 （厳しく）真美！

真 美 ……（そっぽを向く）

昭 子 真美ちゃん、言うんか？ あんた、きつい子やなあ。

真 美 ……。

忠治の目の合図で、昭子と加代を除く仲間たち、十三二と真美を気にしながら、上手に去る。

昭 子 （忠治のうながしに対して）私は、一平ちゃんに頼まれたからね。

昭子、屋台の後に退く。

十三二、少し苦しげに胸をおさえる。

加 代 （気づいて、かけより）トミさん大丈夫？

上手奥から、仲間たちの踊りの曲、あるいは、カラオケに合わせての歌が聞こえる。十三二たちの会話の間、断続的に。曲は「川の流れるように」など。

十三二 （苦しみがおさまって）真美。大きい声出して悪かったなあ。

せやけど、人を傷つけるようなことは言うもんやない。加代さんに謝り。

真 美 ……（そっぽ向いたまま）

加 代 私はええんよ。気にしてへんから。

下手から、貴浩の声。

貴 浩 一平さーん。

貴浩、下手に現れる。真美と同じく、下校の途中、通学鞆を手にしている。

貴 浩 さあー、今日もおいしいタコ焼き、焼きに来たで。

（真美に気づいて）うわー、お姉ちゃん！

真 美 （貴浩を見て）「お姉ちゃん」て。貴浩、あんた何でここへ？

貴 浩 お姉ちゃんこそ、何で？

真 美 友達に言われてん。「天王寺公園の所で歌てる人の中に、あんたとこのお祖父ちゃんとうよう似た人がいるよ」て。

貴 浩 女のしゃべりは最低やなあ。

真 美 貴浩。あんたも、こんな所で何してんのんよ。

貴 浩 僕？ タコ焼き作りや。これが、なかなかむづかしい。くるっと廻すのはうまくなったけど、粉をとくとなるとなあ。……

真 美 何言うてんの！ あんたまで、お祖父ちゃんと一緒になって、だましてたんか？

貴 浩 人聞き悪いなあ。誰もだましてなんかない。お姉ちゃん、一度でも聞いたことあるんか？

「お祖父ちゃん、どこへ行くの？」て。

真 美 お弁当持って出て行ったら、将棋クラブやと思うやろ。

貴 浩 勝手にそう思いこんでるだけやろ。

真 美 お母さんかて、可愛そうや。毎日、パートに行く前に、お弁当作って、お祖父ちゃん送り出してるいうのに。

貴 浩 お弁当いうても、お母さん、晩ご飯の時の残り物^{もん}を詰めてるだけやで。固いタケノコや、イモも、そのまま。

十三二 いいんだよ、貴浩。

貴 浩 そうかて、お祖父ちゃん。……大体、お母さん、それに、(姉を見て)お姉ちゃんも、お祖父ちゃんに対して冷たい。いつも、顔合わさんようにしてる。……晩ご飯でも、お姉ちゃん、一緒に食べへんやんか？

真 美 あたり前や。お祖父ちゃんと一緒に食べても、楽しいことあらへん。

昭 子 あんた、ほんまにきつい子やなあ。
(ひとり言のように) トミさん、居場所がないのんわかるわ。

真 美 居場所がない？

昭 子 ここへ来るんは、私ら一人者^{もん}か、そやなかったら、家^{うち}の中に居場所がない者^{もん}や。

真 美 お祖父ちゃんが、そや言うの？

昭 子 そう。家の中に、会話もなければ、まとまりもない。ご飯食べるのんも、バラバラ。後は自分の部屋で好きなことしてるのんと違うか？

貴 浩 その通りや。アキさん、うちの家、見て来みたいやなあ。

真 美 あんたかて、自分の部屋でファミコンばかりしてるやんか。

貴 浩 ちょっと前まではな。けど、この頃、よう食事のあとで、お祖父ちゃんの部屋へ遊びに行くんや。知らなかったやろ。

真 美 将棋でも教えてもうてるんやろ。

貴 浩 それもある。けど、色んな話、聞くこともあるんや。お祖父ちゃん口べたで、話が全々前へ進まへん時もあるけど。
(祖父に向かって) お祖父ちゃん、こないだのシベリアの話、また聞かしてや。

十三二 ああ、また聞いてくれるか。話しきれんぐらいあるからなあ。

真 美 貴浩。何で急にお祖父ちゃんの肩持つんや。

貴 浩 お姉ちゃんこそ、何でそんなに嫌うんや。

真 美 お祖父ちゃんが一緒に住むようになってから、家の中、暗うなってしもた。あんなに明るかったお母さんも、何もものいわんようになってしもた。……お祖父ちゃんは、何考えてんのかわからへんし、……それに、こんな所で歌なんか歌てる。たまらんわ！
お祖父ちゃんは、老人ホームへ行ったらよかったんや！

貴 浩 老人ホームへ？ お姉ちゃん、ひどいやんか！

昭 子 長生きなんかするもんやないなあ。……
早う死んで行った、旦那がうらやましいわ。……葬式の日、泣きもせんと、目ギラギラさせて遺影にらんどった私見て、みんな「気の強い女や」言うて、陰口^{かげぐち}たいたいとった。……けど、私は必死やった。これから、どうやって生きて行こか、思てな。なんせ、おなかの中には、赤ん坊がおったからなあ。

忠治、上手より表れ、十三二たちを心配そうに眺める。

昭子 女手ひとつで、子供をかかえて、戦後の昭和を生き抜いて来たんや。……
食べるために、色んなことやって来た……。

十三二 働いても、働いても、食べることさえおぼつかない。そんな時代やった。

昭子 子どものため、子どものため、思て、どんなことでも辛抱した……。そう
やって、学校上げて、やっと一人前になって結婚までしてくれた……。喜
んでたら、ポイッや。

「お母ちゃん、あんまり来んといてくれるか。うちの奴、お母ちゃんにガ
ミガミ言われたら、必ず泣くんや。あいつは、お母ちゃんみたいに強くな
いから」やて。

私、そんなにガミガミ、口うるさいか？ そんなつもりなかってんけど
なあ……。

（しばらくして、真美に向い）真美さん、あんたが今言うたことは、こうい
うことや。

トミさんに、私と同じ思いをさせる、いうことやで。

真美 ……。

昭子 それでも、私らは今幸せや。そんな家族よりも、もっと情のある仲間がいる。
（加代に向って）なあ、カヨさん。

加代 私はなあ、戦争で夫亡くしてから、ずっと1人で生きてきたんよ。50年も
の間、ずっと1人やった。

貴浩 50年。考えただけで、気が遠くなりそうや。

加代 嬉しいことがあっても、1人やと、何か淋しいてな。私に今さら家族は望
まれへん。ただ、友達が欲しいんや。嬉しい時に、一緒に喜んでくれる友
達が。淋しい時に、一緒に泣いてくれる友達が。せやから、私はここへ来
るんよ……。トミさんも、そうと違う？

十三二 そうやなあ……。シベリアから帰って、しばらくして小さな町工場始めた。
お祖母ちゃんと一生懸命に働いた……。そやけど、ニクソンショック。オ
イルショック。次々と何やかやとあってなあ。……苦しい、苦しい時やっ
た……。そんな中で、私は、自分の時間を持つ余裕も、周りを見回す余裕
ものうなってた。去年、お祖母ちゃんが死んで、工場もお父さんに譲った
とき、ふと、そのことに気付いたんや……。自分が空っぽになってしもて
たことに。

貴浩 空っぽ？

昭平、君江、孝子、上手より、様子を見に現れる。

十三二 頭も心もや。自分という人間がどういう人間やったか。それさえもわから
んようになってしもた……。

（真美に向って）真美やお母さんが、私のことを「ようわからん」て言うの
もあたり前や。

忠 治 何言うてるんや、トミさん。わしは、天王寺で久しぶりにトミさんに会った時、嬉しかったんやで。このお人は、昔と全々変らん、と思った。確かに歳はとって、髪は白なってたけど、トミさんのその目は、わしが助けてもろた時の目。そのままや。

真 美 お祖父ちゃんが助けた？

忠 治 私は、シベリアの収容所で、民主裁判にかけられて、もう少しで殺される所でした。

貴 浩 民主裁判？

忠 治 我々日本軍の中に、ソ連軍にゴマをする連中がいてね。民主活動家、アクチブと言っていました。その連中が、勝手に始めた裁判です。つるし上げです。

昭 子 なんで、忠治さんが？

忠 治 倉庫から、食糧がなくなったことがありますね。その日、炊事当番だった私が盗んだということになったんです。

貴 浩 盗んでないのに？

忠 治 そう。ふだんから、私を気に入らん奴、と思ってたんでしょう。

十三二 後でわかったけど、本当は、彼等が盗んでいたんだよ。

貴 浩 そんな無茶な！

忠 治 全員集められた所で、彼等が罪状をしゃべり、「有罪か！ 無罪か！」と、みんなに問いかけます。「有罪！」と言う声が多ければ、死刑です。

貴 浩 死刑！

忠 治 建物の外広場に立てた柱に、一晩中、しばられます。冬は、零下50度、60度。大てい、朝までに凍え死にます。

真 美 ……（顔をそむける）

貴 浩 無茶苦茶や！

十三二 戦争というのはね。人間を狂わせてしまうんだ。現在でも、そう。ルワンダやボスニア。テレビでやってるだろう。

貴 浩 それで、忠治さん。どうして助かったん？

忠 治 君たちのお祖父ちゃんです。仕返しを恐れて、誰も、何も発言してくれないのに、君たちのお祖父ちゃんが、命をかけて証言してくれたんです……。アクチブの連中も、反論できず、私を放免」するより仕方なかったんです……。トミさんがおらなかったら、わしは……。

真 美 お祖父ちゃんが、……。

貴 浩 お祖父ちゃんは、立派な人やったんや。な、お姉ちゃん。

真 美 ……。

十三二 今の暮らしの中で思い出すのは、何故か50年前に亡くなった、シベリアの仲間のこと。

亀井上等兵は、故郷に、年老いたお母さんを一人残していました……。中村二等兵は、召集された時、まだ1歳だった娘さんの写真。色あせた、ボロボロになった写真を、よく内ポケットから取り出して眺め、涙を流し

ていました……。彼らの分まで生きなくてとはと、日本に帰って来たのです。
（真美と貴浩に向かって）今日、忠治さんと、ここでは是非歌おうて決めてた歌があるんだ。

照 子 「是非歌おう」て？

忠 治 うん。「異国の丘」

十三二 （改まった口調で）皆さん、さきほど申しましたように、今日は、私たち、片桐十三二と、加藤忠治が、シベリアから、この故国日本に、無事帰還してきた日であります……。

昭和20年、満州の地で終戦を迎えました私たちは、ソ連軍により、シベリアに送られ、ラーゲリー、収容所に入れられました……。コムソモリスク第13収容所。そこでの、3年余りの生活は、想像を絶する酷しいものでした……。酷しい寒さ。労働。そして、乏しい食糧……。

貴 浩 （姉に向かって）お祖父ちゃん、どんなもん食べてたか、知ってるか？
一食、たった一個の黒パンと、お椀一杯のスープ。

真 美 ……。

貴 浩 虫を食べたこともある、て聞いた。

真 美 虫を？

貴 浩 樹の皮を剥いで、その下にいる虫を捕まえて、焚火で焼いて食べたそうや。

昭 子 ヘビやネズミも食べた、て聞いたよ。

十三二 もうええです。そんなこと……。改めて^か彼の地で亡くなった同胞は、約7万人と言われています。私たちの隊も、私を入れて十人。揃うて日本へ帰ろう。それまでは、何としても生き抜こう、生き抜くんだと、励まし合ってきました……。しかし、無事この日本に帰ることができたのは、わずか、私と、忠治さんの2人でした……。それ以外は、民主裁判、極度の疲労、それに栄養失調。次々と死んで行きました……。絶句）
（しばらくして）私たち、彼等が亡くなるごとに、シベリアの固い土、凍りついた固い土を掘り、亡骸^{なきがら}を埋め、ささやかな木ぎれの墓標を立てました……。

その時、その度に、心から歌ったのが「異国の丘」です……。再び、絶句）

尚、十三二の話の間に、上手、下手から、路上の仲間、見物人などが現れ、人数が増える。
一平も、戻っている。

十三二 （気をとり直し）その戦友たちの冥福を祈りまして、私たち、只今から「異国の丘」を歌います。

忠治、装置にカセットを入れる。

十三二 忠治さん、ええかい？

忠 治 ええよ。

忠治、装置のスイッチを押す。
「異国の丘」の曲が流れ始める。

十三二と忠治、マイクを手に、歌い始める。

仲間たち、誰からともなく、歌に合わせて手を叩き始める。

真美と貴浩、歌っている祖父と忠治の姿を、くい入るように見つめる。

真美、加代に近より、あやまるように頭を下げる。

十三二、突然、歌うのを止め、苦しそうに胸を押さえて、その場にうずくまる。

忠 治 トミさん！

忠治、十三二を抱きかかえる。

加 代 トミさん！ どしたん！

仲間たち、手拍子を止め、口々に言葉をかけながら、十三二を囲み、心配げに覗き込む。

真美と貴浩 お祖父ちゃん！

真美と貴浩、祖父のそばに駆け寄る。

仲間の一人が、カセットを止める。

真 美 救急車！ 誰か、救急車呼んで！

一 平 よっしゃ！

昭 子 一平ちゃん、119番やで！

一 平 わかってる！

一平、下手に走り去る。

真美と貴浩 （口々に）お祖父ちゃん！ お祖父ちゃん！

十三二、囲まれて見えないが、息を引きとった様子。

仲間たち （それぞれに）トミさーん！

囲みの中から、真美と貴浩の鳴咽おえつの声が聞こえる。

仲間たち、それぞれにうなだれる者。合掌する者。

しばらく、その状態が続く。

忠治、十三二を囲む輪から去り、装置のスイッチを入れ、流れ出る「異国の丘」の歌に合せて、歌い始める。

加代たち仲間も、連られるように、次々と歌い始める。

一平も戻って来て、歌に加わる。

忠治、歌うのを止め、上手に少し離れて立つ。

忠 治 （虚空こくうに向かって叫ぶ）トミさーん！……

片桐兵長どのー！（と絶叫する）

忠治、叫び終えた後、不動の姿勢をとり、右手をサッとあげて、挙手の礼をする。

曲、高まり、歌も熱を帯びる。

涙ぐむ者。あふれる涙を拭おうともしない者。など、それぞれに。

忠治は、挙手の礼の姿勢のまま、微動だにせず、虚空を凝視している。

——幕閉じる——



出口敏雄 略歴

昭和2年 大阪市生まれ
昭和20年 大阪府立豊中学校卒業 広島市立工業専門学校入学
昭和21年 大阪府立機械工業専門学校(現大阪府立大学工学部)に転学
昭和23年 同 校卒業
学校法人追手門学院に奉職(中学部勤務 理科・技術科)
昭和42年 新設の茨木学舎に転属(昭和51年度まで)
昭和57年 追手門学院大手前中高等学校教頭就任
昭和60年 同 校 校長就任
平成2年 校長辞任、退職
昭和63年～平成元年度
大阪府私立中高等学校理科教育研究会会長
大阪学校劇作研究同人会同人
社団法人日本児童演劇協会会員

『群れの人びと』より